

## 一八七〇年代および八〇年代のドイツ労働運動の構造（下）

小林, 栄三郎

<https://doi.org/10.15017/2320121>

---

出版情報 : 史淵. 92, pp.1-23, 1964-01-31. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 一八七〇年代および八〇年代のドイツ労働運動の構造（下）

小林 栄 三 郎

七

これまで見てきたところによって、ドイツ労働運動の社会的構造にかんするエンゲルスの見解（一八八一年一月三日書簡）が、すくなくとも一八七〇年代および八〇年代について、若干の修正をまぬかれえないことは明かになったように思われる。この時期のドイツ労働運動の最も活発な担い手は、エンゲルスの強調したような「大工業の労働者」(die Arbeiter der Grossindustrie)ではなくして、エルンスト・エンゲルベルクが指摘したように、中小工業の熟練(修得)労働者(die gelernten Arbeiter in der Klein- und Mittelindustrie)であったとみるべきであろう。もちろんエンゲルベルクのように「大工業の労働者はまだ動いていない」というのは、いい過ぎである。大経営の労働者も或る程度まで動いていることは、本稿ですでに検証してきたとおりである。<sup>1)</sup>しかし、七〇年代および八〇年代に最も活躍したのは、やはり中小工業の労働者であり、それも、いわゆる不熟練(不修得)労働者ではなく、「ゲレルンテ・アルバイター」と呼ばれる熟練(徒弟としての年期をいれて修業をつんだ、修得)労働者であった。

こうした労働者層に支えられたドイツ社会民主党が一八七八年から九〇年までの「社会主義鎮圧法」のもとに展開した闘争はめざましく、さればこそレーニンはこの時期を「ドイツ労働運動の英雄時代」と呼んだのである。このような闘争

は、いかにして可能であったか。一八七五年五月、ゴータにおけるラッサール派とアイゼナツハ派との合併会議では、ラッサール派の「全ドイツ労働者協会」(der Allgemeine Deutsche Arbeiterverein)が公称一六、五三八人の協会員を代表する代議員七一名。これにたいするアイゼナツハ派の「社会民主労働者党」(die Sozialdemokratische Arbeiterpartei)は、公称九、一二一名の党員を代表する代議員五六名<sup>(註)</sup>。だからアイゼナツハ派のほうが、公称党員数では七、四一七名、代議員数で一五名だけすくない。もちろん、この合併はラッサール派の幹部が先行き不振の見通しをもってアイゼナツハ派にもちかけたものであるから、主導権はアイゼナツハ派のほうにあったとみてよいが、同派はラッサール派を抱きこむために大はばな譲歩をしている。合併によって生まれた「ドイツ社会主義労働者党」(die Sozialistische Arbeiterpartei Deutschlands)も、指導部の構成で、幹事会(Vorstand)五人のうち三人までラッサール派に提供している。第一幹事(Erster Vorsitzender)はラッサール派のハーゼンクレーファー(Hasenlever)であり、第二幹事(Zweiter Vorsitzender)もラッサール派のハルトマン(Hartmann)だ。アイゼナツハ派は二人の記録係(Schriftführer)のうちの一人に自派のアウアー(Auer)をあつ、もう一人の記録係はラッサール派にまわし、会計(Kassier)に自派のガイプ(Geip)を送りこんだにすぎない<sup>(註)</sup>。しかもこの会議で決まった「ゴータ綱領」は大はばにラッサール派のイデオロギーを入れたため、マルクスおよびエンゲルスからきびしい批判を受けねばならなかった。こうした綱領と黨員構成しかもちえなかったドイツ社会民主党(正確にはドイツ社会主義労働者党)が、ゴータの合併後わずかに三年を経て迎えたのが社会主義鎮圧法の大弾圧である。その法は一八七八年一〇月一九日に発布され、当時のドイツとしてはあらゆる予想をこえた峻厳さで実施された。このすさまじい弾圧のもとに、いかにしてあのような闘争が遂行されえたのであろうか。鎮圧法が解除されたのちの一八九〇年代には、もはやドイツ社会民主党の活動に鎮圧法下のような結束はみられなくなる。九〇年代の後半には、かつての「英雄時代」の指導者層そのもののなかから「修正主義者」と呼ばれるような人びとがあらわれてくる。こうした事情は

いかに説明されるか。あとからふりかえてみると、ドイツ労働運動の「英雄時代」は社会主義鎮圧法という弾圧下の特殊の条件のもとにはじめて可能となった、といえるかもしれない。ともあれ国際労働運動史の視点からみて、ドイツの労働運動が理論と実践とにおいて世界の労働運動のトップ・リーダーたちのあいだに真に指導的役割を果たしたのは、じつは第二インターの時代ではなくして、鎮圧法の時期であったようにも思われる。このように考えると、社会主義鎮圧法という新しい条件のもとにドイツ社会民主党の指導する労働運動がその構造および機能においていかなる変化をとげたか、その闘争のエネルギーはどのように組織され、いかなるメカニズムによって効果をあげたのか、こうした問題を解明することが重要となる。これらの問題にたいしては東ドイツの史学界が大いに力をいれているが、まだじゅうぶんに掘り上げられているとはいえない。

鎮圧法によって一定の地域から追放された人たちが地方の党員に与えた組織的ならびに機能的な影響の一端は、ペーベルの自叙伝によってもうかがわれる。それによると——ひきつづく追放者にたいする警察のいやがらせは、当局の予想しなかった一つの結果を生んだ。迫害によって極度の怒りをおぼえた人びとが都市から都市へと移動し、そこに党の同志をたずねる。同志は手をひろげてこれを迎え、こうして被追放者の怒りと憤激は迎え入れた人たちに伝わり、人びとは相たずさえて団結と行動とにたちあがる。こうして地域的な秘密の結合が数多くつくられた。これらの結合は、もし追放された人々たちによる扇動がなかったら、ほとんど発生しなかったであろう。この現象は紀元後のはじめの諸世紀におけるローマの諸皇帝とその手先によるキリスト教徒の迫害を想いおこさせる。迫害をのがれるためにローマ帝国の辺境に入ったキリスト教徒は、いたるところに新しい教えを説き、ローマ帝国はそのため大いに掘りくずされたので、かれらを破壊者として恐れた。ドイツにおいても、追放された人たちはたいがい知識のゆたかなエネルギーな人物であったから、かれらは党がこの人びとのために払った財政的負担に比べて二倍も三倍も値うちのある活動を党のためにしてくれたわけであ

る。このことはしだいにわれわれの敵どもにもわかってきた。小都市の市長や郡役所などから、ひきつづいて上級官庁に苦情がうったえられた。被追放者が自分たちの地域にきておよぼす禍害が大きいというのである。そこで一八八六年以降になると、すくなくともベルリンでは、追放はまったく例外的にしかおこなわれなかった。かれらは、逮捕した人たちに罰を科したのちに、いったものだ。「われわれはお前たちを追放しない。お前たちは外で扇動するから。だが、ここでなら、われわれはお前たちを嚴重に監督できる」と。<sup>(4)</sup>——このベーベルの記述はいささか誇張されているとしても、弾圧によってかえって強化される闘志と同志的結合のもとに、地方組織の機能が賦活され、中核的活動家を迎えて地方における指導部の人的構成も変わってゆく状況の一端がうかがわれる。

鎮圧法時代のドイツ社会民主党の公式の機関は、およそ三つあったと考えられる。第一は、党の大会(Kongress)である。大会といっても平時のように党員の集会で代議員を選挙するわけにはいかぬ。それは国外で秘密に、比較的少数の代表者によっておこなわれた。それでも一八八〇年八月二〇日—二三日のウィーデン大会(Wydener Kongress)では五六名の代表者が集っている。ドイツで名のとおった党員はほとんど出席したようである。リープクネヒト、ベーベル、ハーゼンクレーファー、アウアー(Auer)、フリッツヒ(Fritzsche)、フローメ(Frohme)、グリレンベルガー(Grillenberger)、モッテラー(Motteler)、シュリューター(Schlüter)、ファールタイヒ(Vahlreich)、フォルマー(Vollmar)、ヘルンシュタインなど。<sup>(5)</sup>一八八三年三月二九—四月二日のコペンハーゲン大会でも、六〇名が出席した。なお一八八七年一〇月二日—六日にはザンクト・ガレン(Szt. Gallen)で七九名(うちドイツから七四名)によって党大会(Parteitag)が開かれている。<sup>(7)</sup>

第二は、帝国議会(ライヒスターク Reichstag)における社会民主党の議員団である。スイスで機関紙「ゾツィアールデモクラート」の秘密発送管理の責任者となっていたユーリウス・モッテラー(Julius Motteler)は、一八九五年にイタ

リアの同志にあてた報告書のなかで、鎮圧法時代をかえりみて書いている。「社会民主党のライヒスターク議員たちは、普通選挙権にもとづいてわれわれの党员および味方の人びとによって公然と選出された合法的な、われわれの自然の信任者 (Vertrauensleute) であり、わが党の代表者であったし、持続的にそうであった。ライヒスターク内のわが議員団は、まさにそれゆえに、われわれの『党幹事会』 (“Partei Vorstand”) をなしていた。党の合法的な指導部もまた、そのつどの議員団幹事会 (Fraktions-Vorstand) のすがたのなかに、用意されていた」と。<sup>(8)</sup> さきに述べたように、一八七五年のゴータ会議では党指導部として五名から成る「幹事会」が選挙されたが、鎮圧法のもとでは、ここでモッテラーが書いているように、ライヒスターク議員団が幹事会の機能を果たしていたように思われる。エルンスト・エンゲルベルクも、鎮圧法の時代にはライヒスターク議員団が、すくなくとも党の大会と大会とのあいだの期間では、自分たちこそ党の指導権をもつものだと、形式的には主張する根拠をもちえたことを認めている。<sup>(9)</sup> 鎮圧法は社会主義的活動の一切を禁じようとしたが、議員への選出および議員活動そのものは禁止しえなかったからである。この議員団のなかでマルクスおよびエンゲルスの指導方針を尊重する態度をとっている人びとを左派と呼び、そうでない人たちを右派と称するならば、数の上だけというと鎮圧法期を通じて右派のほうが多数であり、左派は少数派であった。右派はしばしば「ゾツィアールデモクラート」に反撃し、とくに一八八七年から鎮圧法の実施のきびしさがいくぶん緩和されると、右派の議員たちは、合法的に発行されたいくつかの労働者新聞を使って党の機関紙「ゾツィアールデモクラート」を批判する態度を示しはじめた。しかし、数的には少数派であったけれども指導権は左派がもっており、その左派の指導権をくつがえすことは、右派にはできなかった。<sup>(10)</sup> なぜ少数派たる左派が党内の決定的勢力たる地位を、鎮圧法期をつうじて維持しえたか。党内の力関係、メカニズムはどうなっていたのか。ここにわれわれの究明すべきポイントのひとつがある。

ドイツ社会民主党の公式の機関の第三は、党の正式の機関紙(週刊)たる「ゾツィアールデモクラート」である。それ

は国外で印刷されて秘密にドイツへ発送され、秘密のうちに配布される。だから、この機関紙は配布の過程において黨員をかたく結びつける。それぞれの地方にまとめて発送されるので、その地方の責任者が地方組織を、その配布の過程そのものによってしっかり掌握することになる。そして機関紙には読者の投書欄があるから、読者はこの欄をつうじて全国の黨員の声をきくような思いをする。エンゲルベルクが、機関紙「ゾツィアールデモクラート」は地方の諸組織を「目にみえない形で結合した」といつているのは、こうした事実を指すのであろう。しかもそれは週刊であるから、毎週、読者たる黨員や労働者はイデオロギー的に、また政策的に指導され啓発され、「階級敵」にたいする防衛と攻撃の仕方を教育されることになる。それゆえに「ゾツィアールデモクラート」は「党全体のなかでの鍵」の地位にあった、とエンゲルベルクがいうのも、うなずける。要するに、鎮圧法のもとでの抵抗路線を指導した最も重要な党機関は、まさに機関紙であったとみてよい。そこで、この機関紙の創刊のいきさつ、その管理運営の方針が決められていった過程、さらに機関紙と他の党機関との関係をよくみていくことが、われわれの大切な課題となる。ライヒスターク議員団の左派が数的には少数派でありながら、鎮圧法期をつうじて決定的勢力たりえたのは、かれらが機関紙を掌握していたからである。

## 八

ペーベルが自叙伝に書いているように、鎮<sup>ウ</sup>圧法下のドイツでは非合法でも、外国で発行すれば、外国では合法的出版物だ。だから、国外にいる黨員のあいだに、まず社会民主党の立場に立つ機関紙の必要が痛感された。鎮<sup>ウ</sup>圧法下のドイツで合法的に発行をゆるされたものは、内容的に彼らの要求をみたしえないものばかりだったからである。国外の黨員ばかりでなくドイツ国内でも、しだいに機関紙への要望が黨員のあいだにたかまった。それによって原形的な啓蒙をおこない、警察や裁判所のやり方を批判し、党の戦術を黨員に理解させ、さらにいろいろの情報や助言を黨員に与えるためである。

鎮圧法が出たのちに国外で発行された社会民主党系の最初の新聞は、カール・ヒルシュ (Karl Hirsch) が一八七八年から翌年にかけてベルギー (のちロンドン) で発行した「ラテルネ」(Die Laterne) である。これはヒルシュ個人の責任において刊行されたものであるから、「定期刊行物にかなするドイツ労働運動文書集」の編注者グローハルのように「党の最初の非合法の機関紙 (旁点小林)」(erstes illegales Organ der Partei) とするのは、正確でない。ヒルシュはこの新聞で、マックス・カイザー (Max Kayser) などドイツ社会民主党のライヒスターク議員の或る人たちの議会演説をするべく批判し、マルクスおよびエンゲルスの支持をえていた。そこで、のちにスイスで機関紙を出すことになると、マルクスおよびエンゲルスは編集長としてヒルシュを推した。

党の責任において国外で機関紙を発行することを社会民主党のライヒスターク議員団に提案したのは、ベーベルとリープクネヒトであったという。ベーベルの自叙伝によれば、はじめのうち意見は大きくわかれて、「すくなくからぬ議員」(nicht wenige Mitglieder) がこれに反対した。かれらはこのような機関紙の創刊が党にたいする当局の態度を硬化させ、鎮圧法の廃棄を遅れさせるだけだと考え、この際は当局を刺激するようなことを避けるほうが賢明だと主張した。「こうした見解にリープクネヒトと私は断然反対した。ついに人びとは、やってみることに一致した」とベーベルは書いている。おそらくこの記述は事実であろう。そうとすれば、党のライヒスターク議員団のなかでベーベルとリープクネヒトの二人が機関紙の国外発行の発議をし、これに反対する「すくなくからぬ議員」を説得してこの挙に踏みきらせたことになる。それは同時に、ドイツ社会民主党のなかでこの二人がもっていた位置と、この重要な段階でかれら兩人が果たした機能とを考えるうえで非常に興味ある事実である。

機関紙はスイスのチューリッヒで発行されることになった。これはチューリッヒにいる三人の党員がこの発行を支援するという事情があったからである。三人というのは、カール・ヘーヒベルク (Karl Höchberg)、カール・アウグスト・シ



トラム (Karl August Schramm) およびエドゥアルト・ベルンシュタイン (Eduard Bernstein) であつた。ヘーヒベルクはフランクフルトの富クジの賭金を集める業者の子で、社会主義に共鳴して社会民主党に加盟し、私財を投じて定期刊行物の出版を支援したが、思想的にはマルクス主義者でなく、アルバート・ランゲ (Albert Lange) の影響をうけていた。シュラムはヘーヒベルクに協力した経済学者で、社会民主党員であるが、やはりマルクス派ではない。ベルンシュタインは当時ヘーヒベルクの秘書 (Sekretär) をしていた。マルクスは一八七七年一月一九日のゾルゲ (Friedrich Albert Sorge) あての手紙のなかで、ヘーヒベルクに言及している。それによると——ドイツでは党内に、それも黨員大衆のなかよりもむしろ、党の指導者たちのなかに、或る腐敗した精神がはびこっている。ラッサール派との妥協が、他の中途ハンプなものとの妥協にもみちびいたのだ。ベルリンではヨーハン・モスト (Johann Most) のようにデューリングと妥協するものがあらわれ、そのほかにも、多数の未熟な大学生や利口すぎるドクトルたちとの妥協がみられる。かれらは社会主義に「一段と高い、理想的な」転換を与えようとしている。すなわち唯物論的な土台 (この土台は、もし人がその土台のうえで仕事をしようとすると、まじめな客観的な研究を要求するものなのだ) の代りに、近代的な神話 (それには、公正・自由・平等・友愛という女神たちが存在する) をもってこようとしている。「ツークンフト」 ("Zukunft") を発行しているドクトル・ヘーヒベルク氏は、この派の代表者の一人で、かれはいわば「株を買う」ことによって黨員の資格をえたのだ——とマルクスはいうのである。鎮圧法(鎮)が發布される前のこの時期から、マルクスたちはヘーヒベルクの傾向にたいして警戒の目を光らせていたわけである。「ツークンフト」はヘーヒベルクの財政的負担のもとにベルリンで月二回発行されていたが、鎮圧法で禁止された。

チューリッヒで発行されるべき党の機関紙の編集をめぐって、マルクスおよびエンゲルスとベーベルたちとのあいだにおこなわれた交渉については、一八九七年九月一九日のマルクスの書簡 (ゾルゲあて) が参考になる。それによると——

ベーベルはマルクスおよびエンゲルスに手紙を書いて、チューリッヒで党の機関紙を創刊したいこと、そしてマルクスおよびエンゲルスの名を協力者としてあげたいことをいってきた。編集者としてはヒルシュを選んではどうだろうか、というのであった。「それにたいしてわれわれは承諾し、(darauf nahmen wir an) (強調はマルクス)、私はヒルシュ(当時パリにいたが、そのちそこから二度目の追放をうけた)に手紙を書いて、編集を引受けるようにいってやった。『ツークンフト』などのなかにひろがり、そして『フォールヴェルト』(“Vorwärts”)のなかへもすでに侵入しはじめているようなドクトル・大学生などの一団(Doktoren-und Studenten-etc.-Pack)と講壇社会主義者の無頼漢ども(Kathedersozialistengesindel)が遠ざけられ、党の基本線(die Parteilinie)が厳密に守られるという保障は、ひとりヒルシュだけがわれわれに与えるものだからである。」ところが今やヒルシュはチューリッヒで、いわば蜂の巣を見つけたことがわかった。五人の男が、ライプツヒの最高の許可をえて、いわば創立委員会(konstituierendes Komitee)を構成している。ヘーヒベルク、ベルンシュタイン(ヘーヒベルクの秘書)、シユラム(たとえ好意ある人物ではあっても、要するに俗物)、およびライプツヒから派遣されたフィールエック(Louis Vierck——この人物も俗物で、ドイツ皇帝の私生児)、そしてベルリンからきた商人ジンガー(Singer)がそれである。この五人が、ライプツヒの最高の許可をえて、創立委員会(konstituierendes Komitee)を構成しており、かれらがチューリッヒにおける管理委員会および編集を監督する委員会(Verwaltungs- und die Redaktion beaufsichtigendes Komitee)として、ヘーヒベルク、ベルンシュタイン、シユラムのトリオを任命したのだ。この三人組が第一審として裁決するといっているのである。そして最終の上告審として、かれらトリオの上にベーベル、リープクネヒト、およびドイツの指導者層のなかの二、三人(Bebel, Liebknecht und noch einige aus der deutschen Führerschaft)がいる。ヒルシュは第一に、カネが誰から出るかを確かめた。リープクネヒトは「党とドクトル・ヘーヒベルク」から出る、と書いてよこしていた。ヒルシュはその修辭的な言葉のアヤをとりのけて、「ヘーヒベルク

クから出るのだ」と要約したが、それは正しい。第二に、ヒルシュはヘーヒベルク、ベルンシュタイン、シュラムの三人組に従属したくない、といった。これは、つぎの理由でいっそう正しい。ベルンシュタインは、事情を知らせてほしいというヒルシュからの手紙への返事のなかで、官僚主義的にヒルシュをどなりつけ、ヒルシュの刊行する「ラテルネ」紙を超革命的(ultrarevolutionär)として非難しているのだから、そうである。わりと長いあいだの手紙のやりとり(そのなかでリープクネヒトは、ちっとも輝やかしい役割を演じてはいない)ののち、ヒルシュは身を引いた。エンゲルスはペーベルに、「われわれも身をひく」(dass wir auch zurücktreten)と書いてやった。ヘーヒベルクの「ツークンフト」やヴァーデ(Wiede)の「ノイエ・ゲゼルシャフト」(Neue Gesellschaft)には、われわれは当初から協力を拒否している。この連中は理論的にゼロであり、実践的に役にたたないくせに、社会主義(かれらが大学の処方にしたがって調査してつくりあげた社会主義なのだ)の、とくに社会民主党の、歯を抜きとり、労働者を啓蒙し、自分たちの混乱した半可通の知識を通していわゆる「教養的要素」を労働者に提供しようとし、とりわけ党を小市民の目からみて尊敬すべきものにしていうとしているのだ。要するに、かれらはあわれな反革命的(Kontarrevolutionär)饒舌家どもだ。今やチューリッヒで週刊の機関紙が、かれらの監督のもとに発行されるというのだ。そしてライプチッヒの人びとの総監督のもとに。編集長はフォルマー(Vollmar)であるという。そのあいだに、ヘーヒベルクがロンドンにやってきた。われわれを餌でおびきよせるためだ。エンゲルスが面会して、ヘーヒベルクがH・リヒターという変名で発行している「社会科学、社会政策年報」(Jahrbuch für Socialwissenschaft und Socialpolitik)への批判によって、かれとわれわれとのあいだの深淵をハッキリさせた。もし、党の機関紙たる週刊紙が、ヘーヒベルクの「年報」式のやり方で実際に発行されることになれば、われわれは公然と、党および理論のこのような退廃に反対して立ちあがらざるをえないであろう。エンゲルスはペーベルなどにあてて回覧状(ein Zirkular)を書いた。(それは、もちろんドイツの党指導者たちのあいだでの私的回覧のためだけの

ものだ。) そのなかにわれわれの意見は、包みかくすところなく述べられている。こうして党指導者の諸君は、警告を与えられたわけであり、かれらはまた、今やここで重大な岐路に立っていることを知るに足るだけ、じゅうぶんにわれわれを知っている——とマルクスは書いている。<sup>(16)</sup> このマルクスの手紙のなかで、かれがドイツ社会民主党の指導部の構造をどのように把握していたかが、うかがわれる。「最終の上告審」を構成するものとして、「ベーベル、リープクネヒトおよびドイツの指導者層のなかの二、三人」という言い方がされている。ここで順位のうえで、まずベーベルが、つぎにリープクネヒトがあげられ、それから「指導者層のなかの二、三人」という表現になっているのが興味ふかい。要するにベーベルとリープクネヒトの地位が重く、この二人のうちではベーベルのほうが重いとみられていることがわかる。

この九月一九日のマルクスの手紙にエンゲルスが「ベーベルなどにあてて回覧状 (ein Zirkular) を書いた」とある。「回覧状」には、日づけがない。しかし、一九日より前に書かれたことは確かだ。その「回覧状」はベーベルあてに書かれているが、終りのほうに「この手紙はドイツにおける委員会のメンバー五人全部へ、ならびにブラッケ (Bracke) ……へあてた報告として書いたものである。」 (Dieser Brief ist bestimmt zur Mitteilung an alle 5 Mitgl. [jeder] der Kom [mission] in D[eu]tsch[an]d sowie an Bracke…) とある。<sup>(17)</sup> 因みにこの五人委員会は、ベーベルとリープクネヒトの發議で、一八七八年一月一日の末に、鎮圧法の犠牲者を救済するために設立されていたもので、ベーベル、リープクネヒト、ハーゼンクレーフアー、フリツチェ、ガイヤー (Geyer) の五人から成っていた。「定期刊行物にかんするドイツ労働運動文書集」の編注者グローハルによると、「この委員会はウィーデンにおける党大会 (一八八〇年) までは、ライヒスタークの社会民主党議員団とならんで (neben der sozialdemokratischen Reichstagsfraktion) 党のオルグ的中心 (das organisatorische Zentrum) にあり、党指導部の諸機能 (Funktionen der Parteileitung) を果たしていた」とい<sup>(18)</sup>う。しかし、当時のドイツ社会民主党の「指導部」は必ずしもハッキリしていない。さきに述べたように、党機関紙の發

行についてもベーベルはライヒスターク議員団に諮っている。だから、グローハルのようにこの委員会が「ライヒスタークの社会民主党議員団とならんで」(旁点小林)党指導部の諸機能を果たしていたというのは、委員会と議員団を対等の地位にあるものように誤解させるおそれがある。党指導部としては、議員団のほうが五人委員会よりも重いとみるべきであろう。W・アドラツキーは一九三三年版の「マルクスおよびエンゲルス書簡集」の注に、この手紙は「ドイツ社会民主党の指導的グループのすべてのメンバー」(alle Mitglieder der führenden Gruppe der deutschen Sozialdemokratie)のために書かれたものだ、といている。<sup>(18)</sup>ブラツケは一八八〇年に三八才で死んでいるが、マルクスたちと親しいリーダーであり、回覧状の当時はライヒスタークの議員であった。しかし、かれは五人委員会に入っていない。だからアドラツキーのように「指導的グループ」といっておくのが、最も無難であろう。なおアドラツキーは、この手紙が九月中旬にエンゲルスによって草案を書かれ、マルクスといっしょに検討のうえ、エンゲルスの手で書きあげられたもので、兩人の合作に成ることは、ベーベルが自叙伝に述べているところによってわかる、と指摘している。ベーベルの自叙伝には「かれら(マルクスとエンゲルス)は一つの覚え書(ein Exposé)をつくりあげた。(中略)、その覚え書をかれらは議員団(die Fraktion)に知らせるために送ってよこしたので、議員団としては、返事について諒解をとげたのち、フリッツェに返事を書かせた」とある。<sup>(19)</sup>もしこの自叙伝の記述が真実とすれば、ベーベルとしては、回覧状はライヒスタークの議員団にあてられたものと解しているわけである。この段階で「党指導部の諸機能」を果たしたのは、やはり議員団であろう。

回覧状は三節から成っている。第一節「ヒルシュとの交渉」、第二節「機関紙のとるべき姿勢」、第三節「三人のチュエリッヒ居住者の宣言」。第一節のなかで、ヒルシュが七月二十六日の手紙に赤字補充の義務は誰が負うのかをたずねたのたいして、ベルンシュタインが七月三一日の手紙で、或る程度の赤字は自発的醵金によってうめられるし、二つ三つの醵金はもう署名ずみだと答えたことが記されている。この七月三一日の手紙でベルンシュタインは機関紙について「監督委

「員会」(die Aufsichtskommission)があること、この委員会はまた上部からコントロールされていることを述べている。回覧状によると——このベルンシュタインの手紙でヒルシュはチューリッヒにある監督委員会の下で編集しなければならぬことを知ったが、この委員会の顔ぶれについては、容易に明言してもらえなかった。ヒルシュがリープクネヒトに出した手紙の返事に、リープクネヒトはチューリッヒの委員会が決して編集委員会ではなく、ただ管理と財政面だけを任せられているものだと言っている。八月一日にフィールエックがヒルシュに書いた手紙によると、「チューリッヒに居住する三人が『編集委員』として機関紙の創立にたずさわり、リープクネヒトの三人の承認をえて一人の編集者を選ぶことになっている」という。「私の記憶するかぎりでは、報告された諸決定のなかに、上記の(チューリッヒの)創立委員会が党にたいては財政的責任と同様に政治的責任をも負うべきだということも述べられていた」(強調はエンゲルス)とフィールエックは書いています。リープクネヒトはヒルシュが編集者になってもチューリッヒの三人組の正式の指揮下に入るわけではないというが、リープクネヒトのコントロール委員会のメンバーで交渉に立ちあつた唯一の人物であるフィールエックは、「三人組の正式の指揮下に入る」と言っている。いったい、どちらがほんとうか。チューリッヒの三人組にどんな権能をゆだねる決定をしたのか。三人組はヒルシュがそののちに出した手紙への返事のなかで、論説の採用についての決定権を要求している。これでは編集委員会どころか、検閲委員会だ。ヒルシュは、ヘーヒベルク自身がパリのヒルシュのところへ来たとき、ようやく二つの委員会のメンバーの名を知りえたのである。けっきょくヒルシュとの交渉が不成功に終つた原因は何か。第一にリープクネヒトおよびチューリッヒの委員が機関紙の財政的基礎を明らかにしなかったこと。機関紙は現在すでに主としてヘーヒベルクから基本金の寄付をえているか、それとも近い将来に全くかれの譲出に依存するにいたるか、いずれかであるとしか考えられないこと。第二、チューリッヒ組には編集のコントロール権はないというリープクネヒトの断言はまったく正しくないことが、そののちくりかえし証明されたこと。第三、チューリッヒ組は編集をコン

トロールするのみか、検閲権さえもつことが確実になったこと。以上三つがその原因だ。ヘーヒベルクの出している「年報」の論説「ドイツ社会主義運動の回顧」は、ヘーヒベルク自身がロンドンに来てエンゲルスに語ったところによると、チューリッヒ委員会の三人組によって書かれたものだという。かれらは要するに小市民層の代表者である。かれらは政府とブルジョワジーにたいして闘争せず、それを説得し、味方にしようとする。上からの不当な取扱いにたいする頑強な抵抗をおこなわず、卑屈な従属に甘んずる。かれらは、社会民主党が労働者党であることに反対し、ブルジョワジーの憎しみを受けることを恐れ、資本主義的秩序の根本的変革でなく、小市民的改良にエネルギーを注ごうとする。従来の支配階級からの出身である人びとが、闘うプロレタリアに結びつくのは、歴史的発展にもとづく不可避的現象だ。しかしプロレタリア運動にプロレタリア以外の階級から出た人びとが参加するときには、ブルジョワ的あるいは小市民的その他の偏見をまったく棄てて、プロレタリア的なのを見方を身につけることが第一に要請される。ところが、かれらはブルジョワ的な考え方や小市民的表象をイッパイ身につけている。ドイツのような小市民的な国では、こんな表象があるのは無理もないが、社会民主労働者党の内部ではそんな表象は許されない。こんな論説を書く連中を、どうして党が許しておくのか、われわれには理解できない。こんな連中の手に多少とも党の指導がゆだねられるとしたら、党はまったく去勢され、プロレタリア的行動力はなくなってしまう——と回覧状は断じている。なお、この手紙をチューリッヒ組に見せることは、「われわれとしては、すこしもさしつかえはない」と書きそえられていた。<sup>26)</sup>

ベーベルは自叙伝のなかで、マルクスとエンゲルスがヘーヒベルクにたいして「ツークンフト」発行当時から不信感をもっていたこと、その不信感がヒルシュからの報告によって「ゾツィアールデモクラート」への協力拒否へと発展したことを述べている。こうして八月二〇日にベーベルはエンゲルスにあてて手紙を送った。そのなかでベーベルは「新たに創立されるべき新聞にかんする貴方の解釈は正しくない」といい、「われわれは、さきに私が貴方に書いたような意味とち

がった意味においては、この新聞の編集がけっして許されないこと、そして、ヘーヒベルクの決定的影響などというものは、まったく問題になりえないことを、貴方に保障できる」と断言している。そのあとでベーベルは、ヒルシュが編集集ことわったためにその代りの編集者となったフォルマー (Volmar) がインターナショナルな運動にもまわめて熱心に活動してきたこと、チューリッヒへゆく前にライプチヒで「われわれと比較的長時間の根本的討議をする予定で、その結果かれはわれわれの意図について正確に知るようになる」と述べている。こうした釈明のあとでベーベルは「貴方とマルクスがはじめに約束されたように、この新聞がほんとうにドイツ・インターナショナルの新聞 (ein deutsch-internationales Blatt) となるため、この新聞に協力されることを期待する」と書いた。なお追記してベーベルは、ヘーヒベルクがこの新聞を物質的に援助するとしても、「われわれは、かれだけに頼らねばならぬわけでは断じてない」こと、すでに諸方面から総計八〇〇マルク入手の見込みがあること、ヘーヒベルクは従来も不当な影響力をえようと試みたことはないこと、などを述べている。「ツークンフト」のばあいは編集者として、かれ (ヘーヒベルク) が自分の見解をできるだけとり入れようとしたのは当然だ、「ゾツィアールデモクラート」の編集にあたっては、「かれは他のすべての著名な党員 (weiter andere bekannte Parteigenosse) と同じ発言権しかもたないし、かれの意見がわれわれの意見にさからってつらぬかれることは絶対になかろう」とまでベーベルは明言している。<sup>(21)</sup>ヘーヒベルクが果たしてどのように考えていたか、その真相はわからない。また、もしマルクスとエンゲルスがこれだけ強硬に主張しなかったら、機関紙の編集はどうなったであろうか。それもわれわれの想像にゆだねられるほかはない。いずれにしても現実には、機関紙はそのち絶えずマルクスおよびエンゲルスと連絡を保ちつつ、マルクスの死後はエンゲルスと密接に結びついて編集された。編集者およびベーベル、リーブクネヒトとエンゲルスたちとの文通が、これを証明している。



## 九

こうして成立した機関紙の活動を中心として、社会主義鎮圧法期のドイツ社会民主党の抵抗はめざましく展開された。しかし、この期間の社会民主党の内部構造をみると、その指導体制はハッキリした制度的な規定をもっていないことが特色であるように思われる。とくに執行部体制が制度的に確立されていない。このことは、鎮圧法期に党のリーダーシップがどこにあるかをめぐって、ライヒスターク議員団の右派と機関紙の編集部およびライヒスターク議員団左派とのあいだに、論争がおこなわれていることから、明かである。そもそもドイツ社会民主党の初期の段階をかえりみても、ラッサールが組織した「全ドイツ労働者同盟」はトップ・リーダーたる総裁(Präsident)の権限を大きく認める指導体制をとっていたが、アイゼナツハ派のほうは、いわば集団指導的体制であり、そのなかでベーベルとリープクネヒトの指導力がとくに強く発揮された。一八七五年のゴータにおける両派の合併当時の指導体制はさきに述べたとおりであるが、幹事会を構成する五人の幹事にはベーベルもリープクネヒトも入っていない。もちろん最終的な最高の決定機関は党大会であるが、代議員の正式の選出も不可能な弾圧下の条件のなかで、トップ・レベルの指導部の諸機関の相互関係もあいまいな漠然たる指導体制のもとで、社会主義鎮圧法との闘争が遂行されるのである。この闘争の過程をかえりみると、この指導体制のあいまいさそのものが、かえっていろいろの内部矛盾を切りぬけることに役立っているともいえる。しかし、そこではなんといってもベーベルの指導力が大きくものをいっている。自叙伝にも書いているようにベーベルは、ドイツ社会民主党のメンバーがさまざまな分子から成り、素養も育ちもイデオロギーもいろいろであることを認め、これらの構成分子をしだいに教育してゆかなければならないという立場をとっていた。こうした立場が、一面ではベーベルの包容力を大きくするとともに、他面ではイデオロギーや行動の指導のうえで厳しさを欠くことにみちびく。そうした短所はまぬかれないし

でも、かれの指導力はこの危機にあたってよく党の統一を維持し、機関紙とマルクスたちとの結びつきを確保し、難局を切りぬけることに大きく貢献した。もちろん、鎮圧法期の大弾圧をハネかえすことができたのは、けっしてペーベルひとの力によるものではない。基本的にはドイツ労働者階級の潜在的存在あるいは顕在的エネルギー、とくにその自覚的な部分のひとびとの不屈の闘志、それに支えられた機関紙の編集部および発送部、さらにその配布にあたったひとたちの献身的努力、そのほかかずかずの要因によることはいうまでもない。そうした要因のうえに立ってこそ、ペーベルの指導力も有効にはたらきえたのである。

社会主義鎮圧法期のドイツ社会民主党の抵抗はついにビスマルクの失脚、鎮圧法の撤廃にみちびき、ひろく国外の革新的ひとびとのあいだにドイツ社会民主党の声価を高めたが、この弾圧法とのたたかいがめざましかったがゆえに、その闘争の歴史がかえりみられるとき、積極的な面だけが強調されて、当時のドイツ社会民主党の弱い面、消極的な面は軽視されるきらいがある。とくに東ドイツがわの研究にはそうした傾向がいちじるしかった。その欠点におちいらず、消極的な面をもえぐるうとしたものとして、エンゲルベルクの業績は高く評価<sup>23</sup>されるべきであろう。こうしたネガティブな面をも深く研究しないと、一八七〇年代および八〇年代のドイツ労働運動の構造および機能を多面的にとらえ、その前後の時期と関連させて正しい位置づけをおこなうことはできないからである。

このような消極面は、鎮圧法期のライヒスターク議員団のなかの主要なひとびと、および機関紙の編集に関係したひとたちを、すこし掘りさげてみれば明かとなる。いまここで、そのすべての人物についてくわしく述べることはできないが、たとえば一八七七年いらいライヒスターク議員であり、右派のリーダーの一人であったヴィルヘルム・ブロス(Wilhelm Bros)は、医師の息子でフライブルク大学にまなび、一八七二年二三才でアイゼナツハ派入党し、同派で重きをなした人物であり、一八八〇年には鎮圧法によってハンブルク市から追放されているが、一八八一年二月四日づけのエンゲルス

にあてたかれ自身の手紙のなかで、社会民主党の解散、新党の組織の必要を説くつぎのような提案をしている。「われわれは他のひとびとを前面におし出してわれわれの身をかくせるようにするために、新しい政党を結成し、新しい綱領をつくってすべてでその民主的分子をひき寄せるように試みるべきではないでしょうか」と。<sup>21</sup>アイゼナツハ派らしいの屈指のリーダーであるブロースにしてこの程度の考え方であった。かれは一八八一年二月一日ライヒスタークにおいて戒厳令問題の討議にあたって、ハーゼンクレーファーとともに、「機関紙『ゾツィアールデモクラート』の態度については全く責任を負わない」と言明した。すなわち中央機関紙を党の機関として認めないという立場をとったわけである。それについて機関紙編集部はただちに激しい抗議をおこない、党員の支持は編集部のように傾いた。<sup>22</sup>ブロースがインテリであったのたいして、ヴィルヘルム・ハーゼンクレーファーは製革工の出身である。一八六二年に二五才で「ヴェストフェーリッッシュ・フォルクスツァイトウング」紙の編集者となり、ラッサールの「全ドイツ労働者同盟」に加盟し、一八七一年に三四才でシュヴァイツァーのあとをついでこの同盟の総裁となり、一八七四年から八八年までライヒスターク議員に選ばれている。またスイスにおける機関紙の初代の編集者ゲオルク・フォン・フォルマーはバイエルンの下級貴族の家系に生まれ、その家系の多くのひとびとと同じく職業軍人を志した。一八六六年プロイセン・オーストリア戦役には一六才で陸軍少尉として参加し、一八七一年にはフランスとの戦争で左の脛骨に重傷をうけた。そのうえ病院に運ばれる途中、二メートル近い長身の重みで担架が折れて脊髄に重傷をおった。その長い療養生活のうちに労働運動への興味が高まったとする旧説にたいして、「ゲオルク・フォン・フォルマー」(一九五八年刊)の著者ラインハルト・ヤンゼンは、一八六九年にすでにミュンヘンでフォルマーがアイゼナツハ派の党員と見なされていた、という事実を提示している。<sup>23</sup>それにしてもフォルマーはマルクスやエンゲルスの思想を体系的に学習したわけではない。ベルンシュタインにしても、マルクスたちの考え方についての基本的な学習は不充分であったように思われる。このひとびとにはエンゲルスが指摘したような小

市民的な考え方が根づよく存在している。こうしたリーダーたちばかりではない。労働者でも賃金の相対的に高いひととは、改良主義的な考え方や労働組合主義的な闘争方式に傾きがちなことは、いずれの国、いずれの時期にもほぼ共通してみられる現象である。とくに鎮圧法期においては純経済的な日常要求の貫徹のみをめざす労働者組織は結成を許されたので、社会民主党のリーダーや労働者のなかに、活動の重点を労働組合主義的運動におこうとするものが出現する。エンゲルベルクが指摘しているように、この傾向は党の中央機関紙以外の、合法的にドイツ国内で出版されているいくつかの労働者新聞にあらわれた。たとえば一八八三年一〇月四日の「ゾツィアールデモクラート」には、「ノルトドイッチェス・ヴォッヘンブラット」(Norddeutsches Wochenblatt) 紙にブレーメン市の社会民主党ライヒスターク議員候補エーメ(Oehme) が書いた見解がくわしく引用されている。それによると、エーメはイギリスの労働組合運動を賞讃し、ドイツの労働運動もイギリスのように漸進主義の立場に立つべきであり、政党から独立して経済的要求に重点をおき、政治的宣伝はその経済的な日常的要求をつらぬくための二次的補助手段にならねばならぬ、とするのである。<sup>(21)</sup>

一八七〇年代および八〇年代のドイツ労働運動について、とくにその主流をなすドイツ社会民主党の社会的基盤および党の内部構造の問題を考察してきたのであるが、マルクスおよびエンゲルスはもちろん、総じてマルクス主義の立場に立つひととは、労働運動における革命性の喪失の原因を論ずるばあい、すくなくとも原因の一部として、小市民的考え方の流入ということを強調する。さきにもた回覧状のなかでも、スイスの三人組は要するに「小市民層の代表者である」と決めつけられていた。三人組のヘーヒベルク、シュラム、ベルンシュタインは「ブルジョワ的な考え方や小市民的表象」をイッパイ身につけている、と書かれている。それでは、なぜ小市民的な心理やイデオロギーが労働運動のなかに入りこむのか。エンゲルベルクによると、この問題はつぎのように説明される——社会のさまざまな階級はたがいにハッキリと分離しているものではなかったし、現在でもそのように分離してはいない。とりわけ一方では労働者階級 (die Arbeiter-

klasse)、他方では農民および都市の小市民 (die Bauern und städtischen Kleinbürger) という両者のあいだには、社会的な発展過程のなかでいろいろの移行と接触点とがある。さればこそ労働者階級は、程度の差こそあれくりかえし階級的 (Klassenfremd) イデオロギーや心理によって影響されるのである。党の内部において、とくに党の指導部において小市民的諸勢力 (kleinbürgerliche Kräfte) が卓越して行くこと、あるいは指導部の諸勢力が小市民的生活へ移行すること (die Verwandlung von Führungskräften in kleinbürgerliche Existenzen)こそ、われわれがとりあつておるこの時代において、労働者階級の党の内部にくりかえし出現するきわめてさまざまのニュアンスをもった日和見主義の社会的根源 (die sozialökonomischen Wurzeln des immer wieder auftauchenden Opportunismus der verschiedenen Schichtungen innerhalb der Partei der Arbeiterklasse) をなすものである。<sup>(22)</sup>

ここでエンゲルベルクが「われわれのとりあつておるこの時代」というのは、社会主義鎮圧法期のことである。要するに、かれは労働者階級と農民および小市民とのあいだに移行と接触が多いということに、決定的な原因を認めようとするものようである。このばあい、エンゲルベルクは「農民および都市の小市民」という表現を用いているから、小市民ということばを広義に使用して農村の小市民ともいうべき農民にたいして、「都市の小市民」といったわけであろう。いづれにしても農民や小市民の階層から労働者となり、小市民インテリが労働者新聞の編集にたずさわり労働運動のリーダーとなるという事例は非常に多い。また労働運動の幹部の生活じたいが小市民化することも、エンゲルベルクは「指導部の諸勢力が小市民的な生活へ移行すること」という表現によって指摘している。たしかにエンゲルベルクの強調するような小市民との「移行と接触」が大きな役割を果たすことは事実であろうが、労働運動における革命性の減少あるいは消失という労働運動史研究上の最大の問題点ともいふべきものを考察するにあたっては、視野をひろげて資本主義体制のかわからの政策による影響、あるいはその体制の論理に適應しようとする労働者がわの主体的諸要因に目を向けることが必要

である。なお一八七〇年代および八〇年代のドイツ労働運動については、本稿にとりあつた問題点のほかに、ヒルシユ・ドゥンカー派の労働運動およびキリスト教系の労働運動など多くの考察すべき問題が残されている。それらを含めて、大きくこの時期全体の労働運動の構造を考えなければならぬのであるが、本稿では果たせなかつた。筆者がふれたかぎりにおいても、研究不足と史料の制約のために、多くの誤りがあると思われる。大方の御教示をお願いするしだいである。

註(1) 「史淵」八六輯、「一八七〇年代および八〇年代のドイツ

労働運動の構造」(上)ページ一一九—一五二二。

(2) Bebel, August: Aus meinem Leben. Dietz 1953. Zweiter Teil, S. 289. Kundel, Erich: Marx und Engels im Kampf um die revolutionäre Arbeitereinheit. Zur Geschichte des Gothar Vereinigungskongresses von 1875. (Dietz 1962) S. 288. これらにマッサール派は一五、三三二人の協会員で代議員は七三名。

(3) Bebel, Zweiter Teil, S. 292. ブロックハウス百科大事典のヴァルヘルム・ハーゼンクレーファーの項に、一八七五年の統一ののち、新たに設立された「ドイツ社会主義労働者党」の第四幹事(4. Vorsitzender)となつた、と記されてゐるのは第一幹事の誤りであらう。

(4) Bebel, Dritter Teil, S. 31—32.

(5) 「史淵」八八輯、「一八七〇年代および八〇年代のドイツ労働運動の構造」(中)ページ一八一—二〇。

(6) Dokumente der deutschen Arbeiterbewegung zur Jour-

一八七〇年代および八〇年代のドイツ労働運動の構造(下)

nalistik, Teil I: Vormärz bis 1905. Bearbeitet und erläutert von Ulrich Grohali. Karl-Marx-Universität Leipzig, 1961. S. 117, 123, 151. Bebel, Dritter Teil, S. 133.

(7) Mehring, Franz: Geschichte der deutschen Sozialdemokratie. Zweiter Teil. Dietz 1960. S. 574, 644.

(8) Engelberg, Ernst: Revolutionäre Politik und Rote Feldpost 1878—1890. Akademie-Verlag 1959. Anhang: Bericht Julius Motelers an italienische Genossen. S. 252.

(9) Engelberg, S. 46, 151—154. しかしエンゲルベルクは、この形式主義的論証は二つの重要な特殊事情を見おとしてゐることを指摘する。この特殊事情はどちらも社会主義鎮庄法によって生みだされたものである。一つは、ライヒスターク議員はたしかに党の最高の代表として選挙されたのであるが、だれを議員候補とするかは、党大会で代議員によって決定されるのではなく、それぞれの選挙区で決められ、一般の選挙権者によって選出される。第二に、党員は鎮庄法によって党員としての活動が事実上ほとんどすべて

非合法化を求めているために、社会民主党のライヒスターク議員団の態度にたいしては、党の全政策にたいしては、ほとんど影響力をおよぼしえない。こうした特殊事情のもとでは、形式主義的論証は効力をもたない——とエンゲルベルクはいう。この指摘は筋をえているように思われる。

(10) たゞの Documents, S. 128—140 参照。

(11) Bebel, Dritter Teil, S. 43—44.

(12) Dokumente, S. 94. Fussnote [17].

(13) Bebel, Dritter Teil, S. 47—48. Bartel, Horst: Marx und

Engels im Kampf um ein revolutionäres deutsches Parteiorgan 1879—1890. Dietz 1961. S. 17—32.

(14) Dokumente, S. 85.

(15) Dokumente, S. 107—109. フォールヘックは、のちのドイツ皇帝ヴィルヘルム二世、当時のプロイセン公子ヴィルヘルムの愛人であった女優 Edwina Vireck の私生児。

(16) Karl Marx-Friedrich Engels: Briefe an A. Bebel, W. Liebknecht, K. Kausky und andere, Teil I. Moskauer-Leningrad 1933. S. 205. Dokumente, S. 106.

(17) Dokumente, S. 106. Fussnote [9].

(18) Karl Marx-Friedrich Engels: Briefe, S. 206. Fussnote 1.

(19) Bebel, Dritter Teil, S. 59. アムンキナーは「ヴェルバウツ」 Sie arbeiten ein Exposé aus, (……) とおぼしめる。アドラ

ツキーの引用の誤りである。

(20) Karl Marx-Friedrich Engels: Briefe, S. 187—206.

(21) Bebel, Dritter Teil, S. 54—61.

(22) 一八八〇年八月のウイーデンにおける党大会でイグナーツ

・アウアー (Ignaz Auer) による提案が採択された。それによると——(1)公式の党代表権は当該の期間のライヒスターク議員たちにゆだねられる。(Die offizielle Parteivertretung wird den derzeitigen Reichstagsabgeordneten übertragen.)

(2)次年のライヒスターク選挙が議員の顔ぶれの大はばの変更をもたらすことがありうる場合には、退任する議員と新たに選挙すべき議員とは、信任者を加えて (unter Bezeichnung von Vertrauenspersonen) なにひとが事務をおこなうことができるかについて、諒解をとり (sich verständigen) なければならない。事務の分割は議員たちのなすべき仕事である (下略)。(3)それぞれの地区における組織 (die

Organisation an den einzelnen Orten) は、その地区に居住する黨員の裁量にまかされる。しかし本大会は、いすこ

においても良好なる関係のため配慮することを黨員の義務として宣言する。(下略)(4)党の公式の機関紙は、チェーリッヒにおいて発行されつつある「ゾツィアールデモクラ

ート」である——とぼしめる。Engelberg, S. 51. しかしこれを見ても党の執行体制は、諸機関の相互関係の点がすこしも明確でない。このうち右派の議員たちはこの決議の第一項をタテにとって「機関紙は議員団に服従せねばならぬ」と主張した。

- ③ Engelberg, Revolutionäre Politik und Rote Feldpost 1878—1890.
- ④ Engelberg, S. 43.
- ⑤ Genkow, Heinrich: Friedrich Engels' Hilfe beim Sieg der deutschen Sozialdemokratie über das Sozialistengesetz.
- ⑥ Dietz 1957, S. 70. Engelberg, S. 68.
- ⑦ Jansen, Reinhard: Georg von Vollmar. Eine politische Biographie. Droste 1958, S. 11—13.
- ⑧ Engelberg, S. 84.
- ⑨ Engelberg, S. 35.



**Die Struktur der deutschen Arbeiterbewegung  
in den siebziger und achtziger Jahren des 19.  
Jahrhunderts. ( III : Ende )**

von Eizaburo KOBAYASHI

In der Periode des Sozialistengesetzes kämpfte die deutsche Sozialdemokratie einen heroischen Kampf. Aber wenn man die innere Struktur dieser Partei untersucht, findet man, dass das System der Parteiführung nicht ganz bestimmt und eindeutig war. Auf Initiative Bebels und Liebknechts wurde die Fünferkommission zur Unterstützung der Opfer des Sozialistengesetzes Ende November 1878 gegründet. Über diese Kommission schreibt Ulrich Grohall, der Bearbeiter der „Dokumente der deutschen Arbeiterbewegung zur Journalistik“ (Karl-Marx-Universität Leipzig, 1961): „Die Kommission war bis zum Wüdener Parteikongress (1880) neben der soziodemokratischen Reichstagsfraktion das organisatorische Zentrum der Partei und übte Funktionen der Parteileitung aus.“ Aber die damalige Parteileitung besteht aus mehreren Organisationen. Über die Möglichkeit der Herausgebung des Parteiorgans („Sozialdemokrat“) beratete sich August Bebel mit der Reichstagsfraktion. Die Worte von Grohall kann zu einer unrichtigen Auffassung, als ob die Fünferkommission eine ebenso wichtige Position wie die Reichstagsfraktion gehabt hätte. In seinen Aufzeichnungen „Aus meinem Leben“ erzählt Bebel: „Das Exposé schickten sie (Marx und Engels) zur Kenntnisnahme an die Fraktion, die ihrerseits durch Fritzsche eine Antwort ausarbeiten liess, nachdem wir uns über diese verständigt hatten.“ Also müssen wir im Auge behalten, dass die Fraktion doch die wichtigere Rolle als die Kommission spielte. Jedenfalls gibt es noch mehrere Fragen über die Struktur der deutschen Arbeiterbewegung in den siebziger und achtziger Jahren des 19. Jahrhunderts. Ernst Engelberg behauptet in seinem Buch „Revolutionäre Politik und Rote Feldpost 1878—1890“:

„Das Überhandnehmen kleinbürgerlicher Kräfte in der Partei, insbesondere in ihrer Führung, oder auch die Verwandlung von Führungskräften in kleinbürgerliche Existenzen bilden in der Zeit, die wir behandeln, die sozialökonomischen Wurzeln des immer wieder auftauchenden Opportunismus der verschiedensten Schattierungen innerhalb der Partei der Arbeiterklasse.“ Vielleicht hat Engelberg recht. Aber die Frage des Opportunismus in der sozialistischen Arbeiterpartei ist zweifellos das wichtigste Problem in der Forschung der Geschichte der Arbeiterbewegung. Bei der Untersuchung dieses Problems müssen wir weiter über den Einfluss auf die Mitglieder der Arbeiterpartei durch die Politik seitens des kapitalistischen Lagers und über dies subjektiven Elemente seitens der Arbeiter durchdenken.